

那智参詣曼荼羅

熊野那智大社の宝物殿に収められている『那智参詣曼荼羅』は、約 5 世紀前に制作され、当時の熊野那智大社とその周辺を描いたものです。現存が確認されている那智参詣曼荼羅の作例は 30 点以上ありますが、この宝物殿所蔵の 1 点は特に保存状態が良く、和歌山県の文化財に指定されています。

教義と世界観

曼荼羅の概念は、密教とともに日本に伝来しました。「曼荼羅」という言葉は、もともと密教の教義と世界観を表現した比較的抽象的な図像を指していました。しかし、長年の間に主要な神社や寺院が布教範囲を広げ、長期にわたってその権威を維持するために使われたこれらの宗教施設の絵画も曼荼羅と呼ばれるようになりました。このような絵画は、対象の霊場を巡礼する人々を描いた参詣曼荼羅へと発展していきました。参詣曼荼羅は教義を伝えるものであると同時に、視覚的な「旅の手引き」でもありました。信奉者の中には参詣曼荼羅を使って「仮想巡礼」をする人さえいました。

『那智参詣曼荼羅』は、参詣曼荼羅の最初期例です。熊野比丘尼（尼僧）たちはこの参詣曼荼羅の写しを日本各地に携行し、熊野信仰を布教する際、視覚的な補助資料として人々の前に広げました。参詣曼荼羅によって、聞き手は自身が参詣する際のイメージを描くことができました。

神聖な建物

『那智参詣曼荼羅』の上部と中央には五棟の本殿が並んで（五棟目はやや後方に下げられている）おり、その左に八社殿と呼ばれる他より長い六棟目の本殿があります。現在の本殿の建物はこれと同じように L 字型に配置されています。本殿の前にはカラスがいます。これらは熊野の伝説において重要な役目を持つ八咫鳥（三本足のカラス）を示唆しています。

この曼荼羅の構図は様々な読み解き方ができます。左上の阿弥陀寺と月は、右上の那智大滝と太陽と明確に対を成しています。これらは陰と陽、あるいは死と生を表す対称構造を作り出しています。また、絵の左上から右下に向かって斜めに伸びる「陰の軸」を見出だす人もいます。死後の世界と関連付けられるこの軸の右下には、補陀洛山寺から船出する準備をしている僧が描かれています。彼は補陀落渡海と呼ばれる殉教の儀式に臨むところです。

主な登場人物

曼荼羅のあちこちに白装束をまとった同じ二人組の参詣者が描かれているのは、彼らが霊場を巡っていることを表しています。同じ風景上に複数の時点を描き込むこの手法は、日本の伝統的な絵画によく見られ、旅の様子を描いた絵巻物にしばしば用いられました。

注目に値するのは、参詣者が男女の二人組であることで、これは熊野信仰が性別による差別をしなかったことを示しています。熊野信仰の開かれた性質は、貴族、庶民、山伏、旅商人、田楽の演者、琵琶を背負った僧侶など、熊野を訪れる人々の多様性にも現れています。昔も今も、熊野では誰もが歓迎されています。

『那智参詣曼荼羅』に描かれている人の多くは、歴史上あるいは伝説上の人物です。その中には次の人々が含まれています。

1：武士から仏僧となった**文覚**は、21 日の間、冬的那智大滝の下に座って不動明王の真言を唱えました。この荒行は、彼が出家して旅の僧となるきっかけとなった殺生を償うためのものでした。文覚は『平家物語』という軍記物語の中でも、鎌倉幕府の初代征夷将軍 源頼朝（1147–1199）に、強力な平家に対して反逆するよう促すという重要な役割を担っています。文覚が熊野の滝の下で行った荒行は、伝統芸術において広く好まれた題材でした。

2・3：**杵羯羅童子**と**制多迦童子**は、凍死しかけた文覚を救い、荒行を成就できるようにした不動明王の眷属です。

4：**和泉式部**（974–1034）は、日本を代表する古典和歌の歌人の一人です。和泉式部は11 世紀初期に熊野詣をしました。伝えられるところによると、参詣直前に月経が始まってしまった式部は、不浄な身では神社に参拝できないと考え、失意に満ちた和歌を詠みました。その夜、熊野の神々が現れ、彼女に気にせず参拝するよう告げました。この説話は、しばしば参詣地としての熊野の革新的な開放性を強調するために語られました。

5：**後白河上皇**（1127–1192）は、1160 年から 1191 年の間に 32 回熊野を参詣しました。このことは、貴族や武士の間で熊野詣の人気の高まるのを後押ししました。研究者の中には、図に描かれている人物は後白河上皇ではなく花山法皇（968–1008）か後鳥羽上皇（1180–1239）、あるいは不特定の「上皇」ではないかと論じた人もいます。